

教師の魅力伝える働きかけ — 「教員養成基礎講座」の実践から —

高 味 淳 [鹿児島大学教育学系 (教職大学院)]

徳 田 清 信 [鹿児島大学教育学系 (教職大学院)]

小久保博幸 [鹿児島大学教育学系 (教職大学院)]

Efforts to convey the appeal of teachers: From the practice of the “Teacher Training Basic Course”

TAKAMI Jun, TOKUDA Kiyonobu and KOKUBO Hiroyuki

キーワード：教職の理解、教員養成指標、資質向上、県教委との連携、オンライン講義

1. はじめに

1.1. これまでの経緯

鹿児島大学教育学部においては、平成19年度「鹿児島県教育委員会との連携による新しい教員養成カリキュラムの開発・実施」事業を推進する中で、教育学部以外も含めた全学の教員養成体制の整備・充実に向けた取組の一環として、「教育実践演習」を試行させた経緯がある。

「教育実践演習」はその後、「教員養成基礎講座」として継続され、教職科目の全体像や教育現場での重点課題等を2・3年次の学生に可視化させ、学びの指針となるような、オムニバス方式による授業システムを開発してきたところである。本講座は当時、医・歯学部を除く全学部を対象に、自由選択の総合講義としてスタートしたが、全学教員養成カリキュラム委員会での審議を経て、平成24年度から単位認定化され、現在に至っている。

1.2. 鹿児島県教員養成指標

1.2.1 教員養成指標の意味

平成28年11月に教育公務員特例法等の一部を改正する法律が公布され、公立の小学校等の校長及び教員の任命権者は、指針を参酌し、その地域の実情に応じ、当該校長及び教員の職責、経験及び適性に応じて向上を図るべき校長及び教員としての資質に関する指標を定めることが義務付けられたところである。そこで、鹿児島県においては、教員に求められる指針を整理し、学び続ける教員として、それぞれの経験や校内での役割等に応じた「かごしま教員育成指標」が策定された。本指標については、教員一人一人が自らの教職生活を俯瞰しつつ、職責、経験及び適性に応じて更に高度な段階を目指す手がかりとされ、採用前の指標についても養成期として示されている。

そこで、本講座においても、その指標等を踏まえ、指標と講義内容等を関連付けながら、現在の講義内容を設定している。また、講師についても、大学教員だけでなく、学校の現職教員及び行政職員（学校籍）等を招聘し、理論と実践の往還を目指した学びとなるようにしている。

1.2.2 教員養成指標と教員養成基礎講座の内容との関連

表1 鹿児島県の教員としての素養と求められる資質（「かごしま教員育成指標」抜粋）

鹿児島県の教員としての素養

| | |
|----------|--|
| 人間性・社会性 | 豊かな人間性と広い視野をもって、他者との信頼関係を築き、多様な発想のもとに鹿児島の未来を担う児童生徒と深く関わる力 |
| 職責感・使命感 | 教育に携わる者としての崇高な使命感を自覚するとともに、教育公務員としての職責感・倫理観をもって職務を遂行する力 |
| 探究心・自己研鑽 | 常に謙虚な姿勢で自己研鑽に努め、教員として必要な資質や教科の専門性を個及びチームとして主体的に高める力 |
| 教育に対する情熱 | 鹿児島の教育的な伝統や歴史を生かし、児童生徒のよりよい未来の実現に向けて、人権教育を基盤とした教育にかける信念や愛情と豊かなコミュニケーション能力をもって児童生徒へ働きかける力 |

| 求められる資質 | 具体的な内容（項目） | 養成期（採用前） | 講義内容との関連 |
|---------|--------------|-------------------------------|-------------------------------|
| 学習指導力 | ・学習指導の構想・実施 | 学習指導要領における目標や内容等を理解している。 | 講座Ⅰ-9, 12, 13 講座Ⅱ-1, 3 |
| | ・学習指導の展開 | 学習指導に必要な基礎的技能を身に付けている。 | 講座Ⅰ-8, 9, 12, 13 講座Ⅱ-8, 9 |
| | ・学習指導の評価・改善 | 評価の考え方や基礎的な学習理論を理解している。 | 講座Ⅰ-8, 9, 12, 13 講座Ⅱ-3, 13 |
| 生徒指導力 | ・児童生徒の理解 | 生徒指導の意義や原理を理解している。 | 講座Ⅰ-3, 10, 11, 14 講座Ⅱ-1, 7 |
| | ・児童生徒への指導 | 生徒指導に必要な技法等の基礎的知識を理解している。 | 講座Ⅰ-7, 10, 11, 14 講座Ⅱ-1, 7 |
| 連携協働力 | ・校務の遂行・運営 | 組織的に諸課題に対応する重要性を理解している。 | 講座Ⅰ-6 講座Ⅱ-1, 2 |
| | ・同僚性と自らの成長 | 教員に求められる役割や資質能力を理解している。 | 講座Ⅰ-1, 2, 7 講座Ⅱ-1, 2 |
| | ・安全管理・危機管理 | 危機管理を含む学校安全の必要性を理解している。 | 講座Ⅰ-10 講座Ⅱ-10 |
| | ・保護者・地域等との連携 | 連携・協働による学校教育活動の意義を理解している。 | 講座Ⅰ-7 講座Ⅱ-1, 14 |
| 課題対応力 | ・特別支援教育の推進 | 障害の特性や支援の方法、支援体制の必要性等を理解している。 | 講座Ⅰ-4, 14 講座Ⅱ-5 |
| | ・情報管理とICT活用 | 情報機器の基礎的活用と情報管理について理解している。 | 講座Ⅱ-11, 12 |
| | ・複式・少人数指導の充実 | 教育方法の基礎的理論を理解している。 | 講座Ⅱ-8, 11, 12 |
| | ・新たな課題への対応 | 学校教育に係る今日的課題について理解している。 | 講座Ⅰ-5, 14 講座Ⅱ-4, 6, 10 |

2. 講座の概要

2.1. 講座の目的

2.1.1 教員養成基礎講座Ⅰ

原則本学の2年生を対象とし、教師の魅力や教師としての専門性に関わる内容などを学び、将来教員を目指す者に求められる資質や能力を身に付けること、教師になるために何をどのように学ばよいかという大学における学びの指針や教師になるための見通しを獲得することを目的としている。鹿児島県教育委員会と鹿児島大学の連携・協力によって行われており、現在の教育施策や課題など事例を交えた内容となっている。

2.1.2 教員養成基礎講座Ⅱ

原則本学の3年生を対象とし、今後教育実習を控えている学生に対して、教育者としての情熱やより実践的な取組の魅力に触れるとともに、教師になるための見通しをもつこと、教員を目指す者に求められる資質や能力を高めることを目的とし、県教育委員会と鹿児島大学の連携・協力によって行われている。

2.2. 講座の開設

2.2.1 受講対象

鹿児島大学（法文学部・工学部・理学部・農学部・水産学部・教育学部）の学生で将来教員を目指している、あるいは興味をもっている、2年生（講座Ⅰ）と3年生（講座Ⅱ）を主な対象としている（各学部を卒業し、教員を目指している卒業生等も含む）。

2.2.2 実施時期

令和2年度は、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、学生の登校及び授業支援システム（manaba）への登録完了の時期を鑑み、例年度よりも1ヶ月程遅らせての実施とした。

講座Ⅰ 令和2年6月～11月の水曜日（17:50～18:50）計15回

講座Ⅱ 令和2年6月～11月の火曜日（17:50～18:50）計15回

受講申込受付期間 令和2年4月20日（月）～5月22日（金）

2.2.3 講師

鹿児島大学教育学部教員、鹿児島大学教職大学院教員、鹿児島県教育委員会指導主事、鹿児島県立高等学校教員、鹿児島大学教育学部附属学校教員

2.2.4 運営

全学の教員養成カリキュラム委員会と連携しながら、鹿児島県教育委員会の協力を得て、鹿児島大学教職大学院スタッフが運営している。

2.2.5 運営上の工夫や留意点

- ・ 学校現場の実践と大学での理論を往還させた学びとなるよう、教育学部教員及び教職大学院教員の専門分野や研究成果・経験等を生かした実践的な講座を開設した。
- ・ 鹿児島県教育委員会指導主事、鹿児島県立高等学校教員、鹿児島大学教育学部附属学校教員等を講師とし、学校教育の動向や学校現場の状況、児童生徒に関わる教育専門員である教員としての情熱や魅力、実践的な取組などが伝わるような講座内容とした。
- ・ 講座修了後、自由記述の感想記入で振り返りを行い、授業支援システム（manaba）上で提出させ、講座のまとめとして感想文を取りまとめ、受講者及び講師で共有できるようにした。また、感想については、講師や運営スタッフが、授業支援システム（manaba）でレスポンスを返すことにより、双方向の関係性の構築を図った。

表2 令和2年度の講座内容と講師

| 回 | 講座Ⅰ（2年生対象） | | 回 | 講座Ⅱ（3年生対象） | |
|----|-----------------------------|-------|----|--------------------|-------|
| 1 | 教師をめざす皆さんへ（教師の魅力） | 教職大学院 | 1 | 教師の資質向上のために | 教育学部 |
| 2 | 教師になるために（教師の資質能力） | 教職大学院 | 2 | 教師の仕事と学校組織とは | 教職大学院 |
| 3 | 子ども理解とカウンセリングマインド | 教職大学院 | 3 | 学校における教育課程の基礎知識 | 教職大学院 |
| 4 | 特別支援教育の基礎 | 教育学部 | 4 | 学校関係法規の重要性 | 教職大学院 |
| 5 | 教育史に学ぶ | 教育学部 | 5 | これからの特別支援教育 | 教育学部 |
| 6 | 学校組織と学校経営 | 教職大学院 | 6 | 総合的な学習の時間 | 教職大学院 |
| 7 | 現職教員とのフリートーク | 現職教員 | 7 | 教育相談とコミュニケーション | 教職大学院 |
| 8 | 教育方法の基礎 | 教職大学院 | 8 | 離島・へき地教育，複式教育の基礎知識 | 県教育庁 |
| 9 | 国と鹿児島県の教育施策の動向と特徴 （学力向上） | 県教育庁 | 9 | 道徳教育と道徳科の指導 | 県教育庁 |
| | | | 10 | 学校保健・安全・食育の基礎知識 | 県教育庁 |
| 10 | 国と鹿児島県の教育施策の動向と特徴 （生徒指導） | 県教育庁 | 11 | 生きる力をはぐくむ授業づくり① | 教育学部 |
| 11 | 教育心理と学習指導 | 教職大学院 | 12 | 生きる力をはぐくむ授業づくり② | 県教育庁 |
| 12 | 小学校外国語の基礎知識 | 教育学部 | 13 | 学習指導と評価 | 教職大学院 |
| 13 | 学習指導要領の基礎 | 教職大学院 | 14 | 学校と家庭，地域社会との連携 | 県教育庁 |
| 14 | 人権教育の推進について | 県教育庁 | 15 | 総括講義 | 教育学部 |
| 15 | 総括講義 | 教職大学院 | | | |

2.3 講座の内容

本年度の講座は鹿児島県教育庁や教職大学院教員を含む学部内教員等の協力を得て，表3に示すとおり「オムニバス形式」で実施している。

2.4 受講生の主な感想（抜粋）

2.4.1 教員養成基礎講座Ⅰから

【国と鹿児島県の教育施策の動向と特徴（学力向上）】

今回の講義では，特に印象に残ったことが二つある。まず一つ目は，主体的・対話的に学ぶということについての対話的学びについてである。今まで対話と聞くとグループでの活動だと思っていたが，子ども同士の協働で力を合わせるものがこれから求められる学びなのだと思ったことだ。二つ目は，教師からの個別指導について，勉強があまり得意ではない児童を引き上げることに目がいきがちではあるが，成績上位の児童のさらに上の学びも重要になることが分かった。

【現職教員とのフリートーク】

今回は，実際に現場で活躍されている先生方にお話を伺った。私は今のところは教師になろうという明確なものないが，他に興味のある対象のものとの間でぼやっとしたイメージしかもてていなかったのでも，具体的な経験について伺えたことはとてもありがたかった。何より，先生自身が様々なことに対して本当に積極的に取り組んでおられて，その話を聞いているだけで教師にはやりがいがある面白そうだと感じられた。教師に関してだけでなく，日常生活面や大学生活での話など，私が最近少し悩んでいたことに関しても，お話があった。本当に貴重でよい時間をもてた。

2.4.2 教員養成基礎講座Ⅱから

【教師の資質向上のために】

教師の資質向上のために、様々な課題（問題意識）に気づき認識する、解決できる課題と解決が困難な課題を分離する、課題を持続し、解決のための考察を発展させるプロセスとの主体的な関わりを鍛えることが必要だと学んだ。将来に不安を持っていることにまた不安を感じていたが、不安や課題を常に持ち続けることが重要と聞いて安心した。将来の不安は尽きないが、在学中の今やるべきことは自分の専門性を高めたり、アルバイトやボランティア等で自分磨きをしたりすることなのだ気づいた。時には「このくらいでいいか」という気持ちの余裕も大切だと知った。

【離島・へき地教育、複式教育の基礎知識】

離島やへき地での教育について興味はあるが、これまで学ぶ機会がほとんどなかったため、先生の経験を踏まえた今回のお話は大変勉強になった。私は高校教員を目指している。最後ご質問させていただいたところ、高校において複式教育を行っているところはないそうだが、今回の講義で学んだことは単式教育においても非常に有効であると思う。発展の段階では、教師は極力干渉しないことやガイド学習を行うことは、生徒の成長に大きく寄与すると思う。離島やへき地以外でもこのような教育を取り入れることは非常に意義深いことであると感じた。複式教育の長所を取り入れた教育をいつか行ってみたいと思う。

3. 講座の工夫・改善

3.1 内容について

これまで講座Ⅱ（3年生対象）で行っていた「現教職員とのフリートーク」を、講座Ⅰ（2年生対象）で行っていた「生きる力を育む授業づくり」と入れ替える形で実施した。入れ替えの大きな理由としては、学年の実態により適しているのではないかと考えたからである。

講座Ⅰで行っていた「生きる力を育む授業づくり」については、国や県の動向を踏まえ、具体的にどのような授業が求められているかを学ぶ講座であり、参加観察実習を経験している3年生の方が、より講座の内容を理解し、次のステップとしての本実習に生かせるのではないかと考えた。また、講座Ⅱで行っていた「現教職員とのフリートーク」については、教職そのものについてのイメージをあまり具体的に抱けていない2年生で行った方が、今後の実習や教職採用についての具体的な目標を抱けるのではないかと考えた。実際、2年生からは、「我々が小学校の時の教職と比べて変化があり、先生方の本音も聞けて非常に参考になった」、3年生からは、「これまでの実習の省察と、これからの実習についての目標ができ、系統的な学びにつながった」という声があった。

3.2 オンラインの活用について

新型コロナウイルス感染予防対策のため、学生が大学に来学できず、テレビ会議システムによる遠隔での講義となった。また、オンラインを活用しながらその他の運営に当たった。

3.2.1 テレビ会議システムによる授業

まず遠隔での授業のよさとしては、手軽に講座に参加できるという点である。講座の開始時刻が

17時50分ということもあり、自宅から帰宅後に参加できるというよさがある。また、他学部から教育学部までの移動が大変な学生もあり、移動時間等のデメリットを解消できる。さらに、アプリケーションの機能を使い、グループ分けなどを短縮して行うことで講義をより効果的に行うことができる。一方、学生の中には、直接対面で話し合い、情報交換をしたり、気軽に講師に質問をしたりする時間もほしいという声もあった。

3.2.2 事前資料の配付

大学の学習管理システム（manaba）を活用し、事前資料の配付を行った。事前配付することで、予習をする学生もあり、効果的で深い学びにつながる一助となった。

3.2.3 データでの感想提出

これまで、評価方法の一つとして、講義終了後に手書きによる感想を求めていたが、振り返りを行ったり、内容を考えたりする際に時間がかかり、短時間であったため、学生の負担になっているようだった。そこで、本年度は講義後に文書作成ソフトでデータによる提出に変更した。与えられた行数以上に多く記述する意欲的な学生が出てくる一方、提出忘れがあるなどの課題も見られた。

3.3 講座を通しての感想

両講座を受講している学生に対して、講座の運営に関する形成的評価も兼ねたアンケートを実施した（回答者数27人）。主なアンケートの内容と回答については、以下のとおりであった。

講義内容や時間設定、資料提供、感想（レポートの量）、講師の選択については、回答した者全員が「満足」または「やや満足」であり、高い評価を得た。また、諸連絡事項や講師からの資料の提供、授業の感想まとめの配布などにおいて学習管理システム（manaba）を使用したことが、こちらも良好な回答であった（図1）。本年度は、新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、当初から遠隔（オンライン）による講義を行ったが、多くの学生から「満足している」という回答を得た。しかし、「やや不満である」と回答した学生がいること（図2）、対面による講義や事例研究、現職教員・指導主事等による直接・個別の指導等を望んでいる学生が多くいることが分かった。自由記述においては、「話し合いや実践的な活動を含んだ講義を希望する」「もっとグループワークをしたい」との回答もみられた。

学部における授業との関連性については、本講座の内容と学部の授業の内容の重なりが多くあることがうかがえる（図3、4）。回を重ねて学ぶ機会が与えられることによって、理解はさらに深

5 manabaの活用
(連絡, 資料提供, 講義後のレスポンス等, N=27)

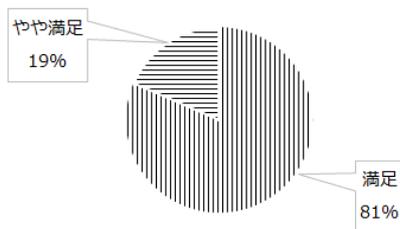


図 1

7 オンライン(zoom)による講義(N=27)

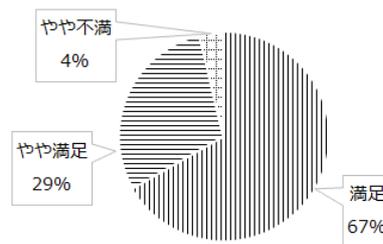


図 2

学部での講義との関連性を感じた講義内容（基礎講座Ⅰ）

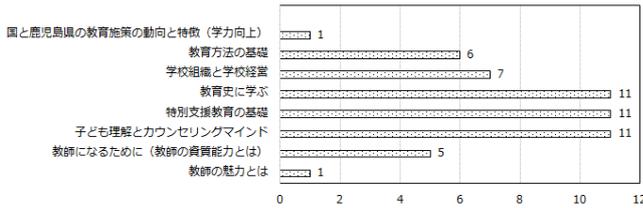


図 3

学部での講義との関連性を感じた講義内容（基礎講座Ⅱ）

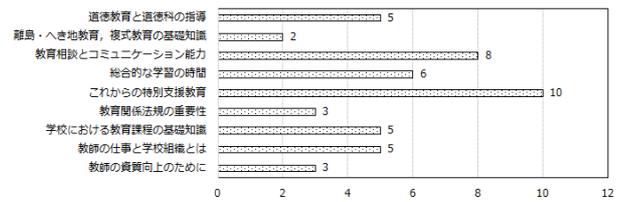


図 4

まっていくなものと考えるが、視点を変えると、国と鹿児島県の教育政策の動向と特徴（学力向上）、教育関係法規や離島・へき地教育、複式教育の基礎知識の内容については、学部において学ぶ機会が少ないとも捉えることができ、学生にとって貴重な学びの機会となっていると考える。自由記述においては、「現職の方の声を聞いてみたい」「本県の教員採用の仕組み等について知りたい」などの回答が見られた。

3.4 教員育成指標との関連

アンケートにおいては、先に述べた、本県における「かごしま教員育成指標」で求められている資質と学生の現状把握の状況、本講座との関連を把握するため、「かごしま教員育成指標」の項目ごとに自己評価を行った。

求められる資質に対する評価が低かったもの（回答が「あまり理解していない」「理解していない」という回答が多かったもの）は、学習指導要領における目標や内容に関するもの、学習指導に必要な基礎的技術に関するもの、評価の考え方や基礎的な学習理論に関するもの、生徒指導に必要な技法等の基礎知識に関するもの、情報機器の基礎的活用と情報管理に関するものであった。（図5～8）

「かごしま教員育成指標」においては、ライフステージに応じて段階的に求められる資質が設定されている。養成期（採用前）である学生にとって、意義ある講座とするためにも、学生が課題と考えている内容について、次年度以降の講座内容として検討していく必要がある。

1 学習指導要領における目標や内容等を理解している。(N=27)

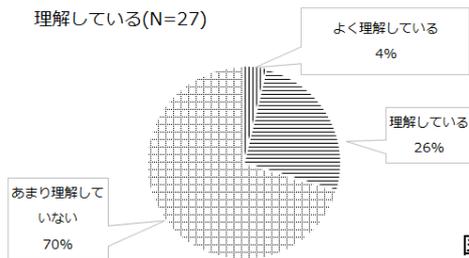


図 5

2 学習指導に必要な基礎的技術に身に付けている。(N=27)

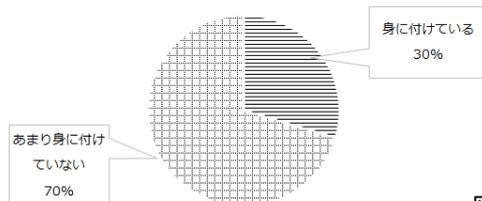


図 6

3 評価の考え方や基礎的な学習理論を理解している。(N=27)

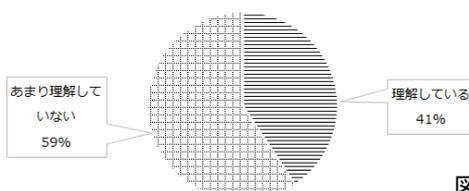


図 7

11 情報機器の基礎的活用と情報管理について理解している。(N=27)

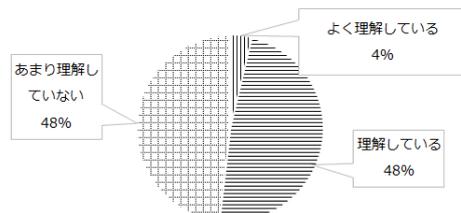


図 8

4. 成果と課題

4.1 教員養成基礎講座Ⅰ・Ⅱの内容

本講座の開設当初からこれまで、教職員に必要とされる資質・能力や学校現場の課題等、学生の意向等を踏まえ、多岐にわたる内容項目が設定され、講師についても、教育学部、教職大学院、県教委の指導主事等をはじめとする様々な分野における専門家が務め、理論と実践の往還を目指した講座内容となっており、受講生のアンケートからも概ね良好な結果を得ている。

4.2 教員に必要とされる資質・能力との関連

本講座の内容は、教員に必要とされる資質・能力について関連させながら設定されているところであるが、受講生にとっては、他講座内容との関連付けが図られてなかったり、資質・能力の必要性について意識されてなかったりする結果も得られたので、事前のオリエンテーションや講座開始時の講座のねらい等をさらに明確に伝える必要がある。

4.3 本講座の授業形態・方法

今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、開始時期を遅らせたり、全ての講義をオンラインで行ったりと、様々な授業形態や方法を模索しながらの取組となった。講義を重ねる中で、オンライン授業の良さを見いだしながら、その都度改善を図ったり、受講生の反応を確認したりするなど、スモールステップではあるが、授業改善の取組に繋がったと考える。学生の評価診断結果の中には、対面授業やグループワーク等を希望する回答もあったことから、オンライン授業と対面授業の良さを生かしたハイブリッド型の授業形態等を模索していくことも考えられる。

5. おわりに

これまでに我々が経験したことのない危機的な状況下であっても、学生の学ぶ機会を確保する取組を模索しながら、今年度の前半の講座を終えたところである。また、振り返りを通して、改めて大学の理論と実践を往還する学びとしての本講座の役割を感じたところであった。このような状況だからこそ、学生の学びを止めることのないように努めることや、社会の状況が様々な変化の中での対応力を身に付けさせること、また、本講座が担う、教職を目指す学生の教職への意欲や職責感・使命感等の高揚に繋がるよう、今後も教員に必要とされる資質・能力と関連付けながら、指導内容の体系・系統を明確にし、教師の魅力を伝える働きかけの一助としていきたい。

〔参考文献〕

鹿児島県教育委員会 (2017) , かがしま教員育成指標

菊永俊郎他 (2014) , 総合的な教職の内容構成を目指した講義「教員養成基礎講座Ⅰ・Ⅱ」の取組, 教育実践研究紀要 (第23巻) 鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター, 275-284

田宮弘宣他 (2008) , 教育学部以外の学生を対象とした「教職実践演習(仮称)」の試行, 教育実践研究紀要 (第17巻) 鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター, 209-219